



日本の幼児教育

牛 島 義 友

日本の幼児教育と改つて論ずるほど私に世界的識見があるわけではない。しかしちょっとヨーロッパの幼児教育を覗いただけでも日本のそれと著しく違い、したがって日本の幼児教育のことが何かと気になってくる。

ヨーロッパでは幼児教育はそれほど振わない。少なくとも幼稚園から保育所へ変りつつあるという印象を受けた。イギリスについて言えば、幼年学校が出来たことよつて幼児教育の問題は一応解決してしまつたかのような気がする。すなわち向うでは満五才から幼年学校に行き、しかもそれが義務制となつてゐる。入学すると午前中はきちんとした基礎教科の学習をやり、午後は比較的自由な雰囲気の中で製作、描画、積木、水遊び、音楽などを楽しんでゐる。午前は学校的であり、午後は幼稚園的で、生活指導や学習態度の訓練などもかなり進んでゐる。したがつて幼児に対する教育的指導の要求

は幼年学校に入ることによつて完全に満されてゐる。五才よりも年少の時代に対しては働く母親のためのナーサリー・スクールの数多く作られ、またよく利用されているが、その必要を感じない家庭では、教育のためにわざわざナーサリー・スクールにやろうとしてゐない。日本の幼稚園のような教育のための保育ということとはイギリスではほとんど問題にならないうのである。

ドイツでも六才以下の幼児を対象とした幼稚園教育はそんなに盛んではない。働く母のための保育所はなかなか立派であり、乳児部も、また学童部も完備してゐるものが多い。これに反してフレーベルの精神をひいた幼稚園の教育というものは振わず、またその経営はかなり困難のようにみえた。西ドイツの主都ボンで特に幼稚園を参観したいと希望したのに対して、案内してくれた幼稚園はカトリックの女子修道院の

経営している幼稚園であった。この幼稚園は比較的よい家庭の子どもが集っているといわれたので、特にスケールの小さな悪い幼稚園ではないと思う。しかし建物からいうと三階建ての僧院の一階にあり、玄関兼広間の部分と二つの保育室から成っているだけで、一つの保育室の広さは十二、三坪くらいのもので二人の保育さんが五十人ほどの子どもを保育していた。庭にも特に遊具があるわけではないし、ただ僧院の庭が遊戯室になっている程度であった。だから幼児教育の条件は日本のそれに比べて一つもよいとはいえない。この年とった保母さんは長い経験をもった元氣な先生で、歌を歌う場合なども先生が少しかすれた声で歌い出すと子どもたちも元氣に歌い出す。(ピアノなどは使わない) いかにもドイツ人らしい元氣に溢れた保育をしていたが、月給が安いといつてこぼしていた。保育料が月僅か五マルクで、自分たちの給料も三〇〇マルクちょっとで、これではやっていけないし、ヒツトラー時代の方がよかったとかこっているような方であった。これで見るとボンのような所でも家庭の親たちは幼児教育の必要を感じてもそれに必要な保育料を払い、設備を整えようという態度はみえず、わずか数マルクの保育料を払っているだけである。これでは安いとこぼす保母さんの給料を払

うだけでも並大抵のことではないと思った。ここでは個人が幼稚園を経営していくというようなことは不可能であり、まして幼稚園でもうけるなどということは考えられない。

フランスのエコール・マテルネはなかなか立派なものではあったが、やはり保育所的性格をもって無料である。一方、同じ町にあった幼稚園は有料であるが、比較にならずお粗末な建物である。子どもの数も少なく、とても経営はたいへんであろうと思われた。もっともエコール・マテルネは徹底的な教育をおこなう。年少の場合は感覺訓練、少し大きくなれば文字の学習や数の計算をやらせているので、幼児の教育が不振だとか不徹底だという意味では決してない。ただ幼稚園的な意味で子どもを通園させているのではなく、したがって在籍数は多いけれども、実際の出席数はお母さんの都合や天候などによってかなり変動しているようであった。

このような状態に比べれば日本の幼児教育、特に幼稚園教育は非常に盛んであり、まして経営もどうやら成り立つということはむしろ不思議な現象というべきではなからうか。日本の親たちが幼稚園のために高い保育料を喜んで負担しているということだけでも実に熱烈な教育的意欲の表れであるともみることができよう。日本人は子どもの教育のために金を出

すことはあまり好きではないらしい。義務教育となると少しばかりのPTAの負担だつてなかなかうるさいし、大学の安い授業料だつて滞納する学生が少なくない。ところが幼稚園の保育に対しては親たちは苦しいなから実に多額の金を喜んで出している。この親の気持の中には近所のお子さんなどこそこの幼稚園に通っているので、自分の子どもも負けずに通わしたいとか、子どもだけにはひげ目を感じさせたくないといったような気持もひそんでいるかもしれないが、とにかくよい子どもに育てようと必死になっている態度がよくわかる。ただ授業料だけの問題ではなく、送り迎えのこと、あるいは母の会などに熱心に出席することなど親の教育的熱意が幼稚園時代に一番強いと言いたいぐらいである。

しかしヨーロッパの親たちは子どもの教育に無関心なわけではないし、またおそろしく金のかかるパブリック・スクールに子どもを通わしている家庭も少なくない。幼児を教育機関にあまりあずけようとしないのは家庭教育に強い自信を持っているためである。イギリスでは家庭が生活の根拠であり、社会の不安から身を守る城であり、また何よりも楽しいスイート・ホームだと言っている。また事実、個人の家屋と幼年学校やナーサリー・スクールと比べた場合にそれほど大

きな差は感じられない。住宅もどっしりとしているし、壁は厚いし、二階建て二戸で一つになっているブロックの大きさだつて決して小さくない。日本では住宅と校舎との間にあまりにも大きな差があり、どこに行っても学校はすぐ目につくが、イギリスでは学校がいつこうに目立たない。また家庭の中で親たちは子どもに強い教育的態度で臨んでいる。特に母親のしつけは厳しい。幼児期においての子どもを甘やかさないし、特に人の見ている前で子どもを愛撫することはみっともないことだと感じているらしい。学童期になつても子どもに対する親の教育は厳しいし、また子どもは親に対して非常に素直である。教師たちもよい子になるか悪い子になるかは家庭の如何によつて決るといつている。

ドイツでは小学校や中等学校は午前中で帰つてしまう。朝八時から続けざまに勉強し、昼食もとらずに一時頃帰校する。このような習慣に対して教師はドイツでは親たちがあまり長く子どもを学校に置きたがらない。子どもの教育は家庭でやりたいし、そのための時間をたくさんとりたいたいなどと答えていた。これだけが原因だとは思われないが、少なくとも家庭での教育を重要視していることだけはじゅうぶんうなずけるであらう。フランスでは午前三時間の勉強がすむと家に帰

ってゆっくり食事をし、二時にまた出校して五時まで勉強する。この十二時から二時までというのは子どものみならず、父親も働くお母さんも兄弟もほとんど皆家に帰って家庭の食事を楽しむわけである。向うでは急いで食事をする事はよいこととはされず、長い食事の間もいろいろと自分の経験を話し合いながら楽しむ。親たちも子どもが思っていることを何でも自由に話すように気を配っているということである。ある学長さんにいろいろ世話になったので夕食を招待しようとしたところ、自分は家庭で食事をしなければならぬし、家庭生活が一番大切と思うのでその招待には応じられぬいと断られたことがある。

このようにヨーロッパでは家庭生活が充実され、家庭教育に対する期待と自信とが非常に強いのに驚いた。日本の家庭は家族制度が非常に複雑で、家庭の圧力が強いのしかかかっているといわれていた。たしかに昔の家庭にはこのような家族の圧力は強く、また家庭教育なども重要な位置を占めていたようである。ところが近代の特に都会生活者の家庭生活は急激に崩壊しつつあるようである。家庭教育に力を入れたり、一家揃って食事の時間を楽しむとか、家庭を憩いの場として安定感を持つというような点ははるかに少なく

なってきたようである。家庭生活の崩壊のテンポは日本の方がよほど急速であり、ヨーロッパの生活の方がはるかに家庭生活的要素が強く残っている。

また日本は学校教育に対する依存の度合があまりに強い。教育を尊重するという点からみれば日本ほど長く子どもを学校にやろうとする国民はいない。英独仏でも義務教育後に上級学校に就学するものは二〇パーセントに至らない。日本では四七パーセント以上進学している。大学の数の多いことはあまりにも有名である。しかしこの学校を尊重する反面に家庭教育に自信を失い、また家庭の教育が不完全である点はおおいに反省すべき点ではなからうか。殊に幼児期は家庭教育がもっとも効果的にできる時代であるのでこの時代に親たちは自信をもって家庭での教育に力を注ぐことが望ましい。それを補うためや援助するために幼稚園教育を受けるのは正しいことであるが、家庭教育に代るものとして幼稚園教育を期待したり、幼児の教育に自信がないので幼稚園にすがるといようなことは正しくない。また幼児教育者もこの母親に対しては家庭教育に自信をつけてやり励ましてやることが大切だが、自信を失わすような指導をしたら大きな過ちをおかしたというべきであらう。